名誉回復、未だ成らず

――反革命罪のキリスト教伝道者・王明道――

松谷曄介

いまさら文革、いまなお文革、いまこそ文革

はじめに

㈠　現代中国におけるキリスト教の概況と課題

宗教は現代中国において政治的に最も敏感な問題の一つである。[1] 文化大革命の終結、そして改革・開放政策の開始から四〇年近くが経った現在、急速に拡大しているキリスト教（本稿では中国語でいうところの「基督教」、すなわちプロテスタント・キリスト教を指す[2]）をめぐる諸問題、特に政府に非登録の「家庭教会」の拡大が、中国政府にとって解決困難な課題となっている。[3]

文化大革命の期間、すべての宗教活動が停止に追い込まれたが、改革・開放政策以降、政府公認の「中国基督教三自愛国運動委員会」に所属する教会（以下、「三自教会」[4]）が活動を再開させた。三自教会は政府の統制・監視下にありながらも着実に教勢を伸ばし、中国社会科学院の調査結果によれば二〇一〇年にはその信徒数が二三〇五万人、牧師を含む伝道者が三万七千人、教会数が二万五千カ所、教会以外の集会所が三万カ所となっている。[5] しかしそれ以上に増加したのが「家庭教会」と呼ばれる教会群である。これは「地下教会」「非公認教会」と呼ばれることもあるが、三自教会に所属しない教会群を指す総称である。[6] 二〇一一年のピュー・リサーチ・センター（アメリカの研究機関）の発表統計では、中国のプロテスタント全体の信徒数が約五八〇〇万人と推計されているが、[7] 同センターと中国社会科学院の統計から推計するならば、家庭教会の信徒総

数は約三五〇〇万人となり、三自教会の信徒数を遥かに凌いでいる。

一九八〇年代から九〇年代、大半の家庭教会は農村に分布しており、「三多」（老人多、婦女多、文盲多）と形容されていた。また政府公認の三自教会が公共空間において合法的に活動できるのに対し、従来の家庭教会は非合法組織であるため秘密裏に活動する存在だった。二〇〇〇年代以降になると急速な都市化に伴う人口流動もあり、知識人層や若者層などのホワイト・カラーを中心とする都市型の新興家庭教会が登場し始めた。[8] こうした都市型新興家庭教会の中には、ソーシャル・メディアを活用したりオフィス・ビルを借りたりして公共空間で活動を行う教会が出現し始めた。こうした動きは家庭教会の「公開化」と呼ばれる。

このような公開化路線を歩む家庭教会の中で急成長し注目を集めるようになったのが北京の「守望教会」[9]だった。同教会は三自教会への加入を拒み続ける一方で、社会団体として独自に合法的登記をする道を模索したが、[10] この路線は政府当局との交渉の中でやがて行き詰まりを見せ、当局の同教会に対する圧力が増していった。そして二〇一一年四月、礼拝をする場所を失った同教会が屋外礼拝を強行した際、当局によって教会の指導者が自宅軟禁状態にされ、屋外礼拝に集まった信徒一六九人が一時拘束される事件が起こった。ＢＢＣ、ＣＮＮをはじめとする欧米メディア、また『明報』『蘋果日報』などの香港メディアがこの事件を大きく報じたことにより、「守望教会事件」として世界に知られるようになった。[11]

事件直後、守望教会を支持する他の家庭教会の指導者たち約二〇人が連名で「我ら信仰のゆえに――政教衝突に関して全国人民代表大会に送る市民による請願書」[12]を発表した。同請願書は中国の憲法条文や世界人権宣言などを参照しながら「宗教信仰の自由」を訴える内容だったが、特に着目すべきは、起草者たちが「我ら信仰のゆえに」という題をつけた点だ。というのも「我ら信仰のゆえに」は、家庭教会の精神的支柱ともいえる王明道（ワン・ミンタオ）（一九〇〇―一九九一）が、三自教会に加わることを断固として拒否していた五五年に書いた一文のタイトルそのものだったからだ。

㈡　王明道とは誰か？

王明道は日本のキリスト教界でも学術界でもあまり知られていないが、中国語圏のキリスト教界では「巨人」[13]あるいは「聖人」[14]と形容されるほどであり、また多くの学術研究がなされている。

王明道は一九〇〇年に、北京のキリスト教信者の両親の家庭に生まれ、ロンドン伝道会系の学校で学んでいる時に洗礼を受けた。しばらく教師をした後、二〇歳の時に伝道者となる決心をし、独学で聖書を研究し、二四歳の時に自

宅で聖書研究会を始め、後にその集会を「基督徒会堂」と命名した。同教会はいずれの教派にも属さない独立教会だったが、彼が三〇年間発行し続けた個人雑誌『霊食季刊』は全国的に広く読まれ、彼は各地の諸教派の教会に頻繁に招かれるほど評判が高かった。

太平洋戦争中、日本当局が占領下の中国教会に欧米教会との関係断絶と教会合同を促し、華北地域では「華北中華基督教団[15]」が設立され、北京のほぼ全教会が同教団に加盟した。しかし王明道は基督徒会堂がもとより欧米教会とは関係を持たない自立した独立教会であること、また同教団とは信仰が異なるため合同することはできないことを理由に、教団加盟を断固として拒否し続けた[16]。

王明道のこうした決して妥協しない立場は四九年以降も変わることなく、中国共産党政府の肝いりで設立された三自教会への加盟にも抵抗し続けた。その結果、五五年と五八年に二度逮捕され、六一年には「反革命罪」の罪名で無期懲役を言い渡された。彼は文化大革命を跨ぐ約二〇年間、投獄され、八〇年に釈放された。しかしその後も名誉回復はされず、反革命罪の汚名を背負ったまま九一年に世を去った[17]。王明道の反革命罪案件は倪柝聲（ウォッチマン・ニー）[18]と龔品梅[19]の案件と並ぶ「三大反革命集団案件」としても知られており、彼は中国の政治と宗教をめぐる諸問題の中で最もタブーな人物の一人なのだ。

王明道（1950年代）

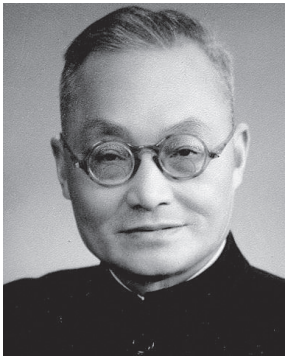
本稿では、反革命罪に問われた王明道という一人のキリスト教伝道者の抵抗・挫折・再起を概観し、王明道の名誉回復をめぐる問題が今日の中国キリスト教においてどのような意味をもっているのか、また政教関係においてどのような影響を与え得るものなのかを考察する。

一　中国共産党政権下におけるキリスト教

㈠　建国初期の宗教政策

中国共産党は無神論を掲げながらも、建国初期には政権基盤を固めるために広範な支持を集める必要があった。そのため当初は比較的寛容な宗教政策をとり、臨時憲法の「共同綱領」には「宗教信仰の自由」を謳っていた。周恩来は五〇年三月に開催された全国統一戦線会議で、「我々は宗教界民主人士に対して、彼らが民主人士であるという身分をもってして彼らと協力する。……我々の政策は、宗教

信仰の自由を保障することである」[20]とまで述べていた。しかしその一方で、中国共産党はキリスト教が「長期にわたり帝国主義の我が国に対する文化侵略の道具として利用されてきた」と認識しており、キリスト教の「発展を助けることはせず」、むしろ「唯物主義と科学知識の宣伝を広範におこなうことにより、徐々に宗教の市場を縮小させ」、さらには「愛国主義の宣伝」により「徐々に教会を帝国主義の影響と経済関係から脱却させ」、教会を中国人の「自治、自養、自伝」の宗教事業に変える方針を明確にしていた。[21]



呉耀宗（1960年代）

中国共産党が白羽の矢を立てたキリスト教内の愛国分子が、中国YMCAの呉耀宗[22]だった。呉耀宗は日中戦争期の抗日運動の中で中国共産党と接触があり、また社会主義にも共感する考えをもっていたため、四九年九月の中国人民政治協商会議にはキリスト教界代表五人の内の一人として招かれていた。五〇年五月、呉耀宗は周恩来と四度にわたり会談し、新中国におけるキリスト教の将来について協議した。その際、周恩来は、中国のキリスト教が「共同綱領」の基盤の上に中国共産党と政治的に「協力」「共存」「相互尊重」し、「帝国主義と断絶」し、「反帝愛国運動」に参与することを再三強調した。[23]

呉耀宗は会談の内容を反映した宣言文を起草し、八回の修正を経て、五〇年七月にキリスト教各界指導者四〇人の連名で、共同綱領の支持、帝国主義との断絶、自治・自養・自伝（三自）を盛り込んだ「革新宣言」を発表した。[24]同年九月には『人民日報』に「キリスト教人士の愛国運動」という社説とともに同宣言全文と一五二七人の署名者の名前が掲載され、その後同宣言への支持を呼びかける署名運動が全国的に展開された。同宣言では「三自」が強調されたこともあり、同宣言は「三自宣言」とも呼ばれ、同宣言への支持を呼びかける一連の運動は「三自革新運動」と呼ばれた。五〇年代前半は土地改革、反革命鎮圧運動、三反五反運動が展開された時期だったが、こうした一連の政治運動の余波を受けてキリスト教内で展開されたのが三自革新運動だったといえる。

(二) 控訴大会から中国基督教三自愛国運動委員会設立へ

三自革新運動に特に拍車をかけたのが五〇年六月に勃発した朝鮮戦争だった。反米国・反帝国主義が広がり、米中

対立が深まるにつれ、中国のキリスト教界はアメリカをはじめとする欧米諸国のキリスト教団体との関係断絶を迫られた。同年一二月末、政務院は中国の文化団体・宗教団体がアメリカや諸外国から資金援助を受けるのを禁止する決定を下した。[25] 翌年五一年三月、中国共産党中央委員会は、中国のキリスト教界が外国人と完全に分離し、指導者層が自治・自養・自伝を推進するように圧力をかける指示を出すと、[26] 同年四月、政務院は全国の三六の教派、二六の団体から代表一五四人を北京に召集し、「アメリカの資金援助を受けているキリスト教団体の処理に関する会議」（通称「北京会議」）を開催した。同会議では帝国主義との断絶を柱とする三自革新運動を組織的に展開するために、呉耀宗を主席とする「中国基督教抗美援朝三自革新運動委員会準備委員会」（以下、「三自革新準備委員会」）の設立が決定され、[27] またアメリカの宣教団体との関係断絶を宣言する「中国基督教各教会各団体代表連合宣言」が可決された。[28] さらに同会議では、キリスト教内部の帝国主義分子を批判する「控訴大会」が実施され、各代表が中国キリスト教内の同僚あるいはアメリカ人宣教師に対する激しい批判を展開した。

その後「打掃房間」（大掃除）と形容された控訴運動は、三自革新準備委員会の主導により上海や南京をはじめ全国各地に拡大し、キリスト教内部の抵抗勢力を排除し、革新宣言への同意・署名を拡大させていった。同宣言発表当初、一五二七人しかいなかった署名者は、朝鮮戦争勃発後の五〇年末には八万人、北京会議が開催された五一年四月には一八万人、控訴運動を経た後の五三年末には四〇万人に急増し、キリスト教（プロテスタント）信徒総数の約三分の二を占めるまでになった。[29]

各地での革新運動の拡大を背景に、五四年七月二二日から八月六日にかけて「第一回中国基督教全国会議」が北京で開催され、全国各地の六二の教派・団体から代表二三二人が集まった。[30] 呉耀宗は同会議において、過去四年間の革新運動を通して中国のキリスト教が帝国主義から基本的には脱却することができ、反帝国主義と愛国主義の意識を高めることができたと総括した。[31] 同会議では、「革新」という二文字が信仰に干渉したり宗教そのものを変革したりするのではないかという誤解をあたえるためそれを削除し、むしろ反帝愛国を強調するために、「中国基督教抗美援朝三自革新運動委員会準備委員会」を「中国基督教三自愛国運動委員会」と改称することが決定された。こうして中国のキリスト教界を一元的に統括する政治指導組織が正式に発足した。[32]

二　王明道の抵抗と挫折

㈠　基要派と現代派

共産党政権成立後も王明道は「基督徒会堂」の活動を通常通り維持することができ、彼の個人誌『霊食季刊』も滞りなく発行し続けることができていた。五〇年七月に革新宣言が出され、多くの教会が相次いでこれを支持していく中で、王明道はこうした動きに距離をとる姿勢を貫いた。

革新宣言とその支持者名が『人民日報』に掲載された後、王明道は日記に「これは多くの無知な信徒の眼にはキリストの栄光と導きと理解されているのかもしれない」[33]と同宣言に対する批判的見解を書いている。また教会の礼拝後の報告の中でも同宣言に触れて、「聖徒は不信者と混じってはならない」[34]と教会員に警告していた。基督徒会堂は三自革新運動に加わらなかったため、全国各地の教会が控訴運動により激しい内部闘争を繰り広げた際にもその影響をまったく受けることがなかった。[35]

王明道が三自革新運動以来、一貫して三自教会を支持しなかった理由は主に二つある。第一の理由は、革新宣言はアメリカをはじめとする欧米のキリスト教組織と関係がある教会・団体がその関係を断絶し、自治・自養・自伝を確立することを強調していたものであるのに対し、基督徒会堂はもとより独立した自立型教会であり、あえて同宣言に署名する必要はないと考えていたからである。[36]王明道は五一年四月に「北京会議」（前述）の開催通知を受け取った際、彼が責任を負っている基督徒会堂はこれまで外国からの資金援助を受けたことがないため同会議に出席しない旨を当局に対して返答していた。[37]

またそれ以上に重要な第二の理由は、王明道は呉耀宗をはじめとする三自教会の指導者たちが聖書を正しく信じていない「不信派」（不信者）であると見なしていたからである。王明道は聖書を字義的に解釈し、聖書の基本要理に立つ極めて保守的な「基要派」（fundamentalit）の立場だったのに対し、彼からすると呉耀宗は聖書の中の救いや奇跡を信じず、聖書を批判的に解釈する「現代派」（modernist）と映っていた。[38]こうした「ファンダメンタリスト―モダニスト論争」は、聖書を学問的・批判的に研究する「高等批評学」（higher criticism）の是非をめぐって特に二〇世紀初頭のアメリカで起きた論争だったが、中国のキリスト教界においても同様の論争が飛び火していたのだった。[39]この論争は王明道が三自教会に加わらなかった背景として重要なものであるため、この問題に関する彼自身の見解を、少し長くなるが以下に引用する。

ここ三〇年来、中国の教会には世界の教会と同様に、信仰面での衝突が存在している。この種の衝突は「基

要派」（fundamentalist）と「現代派」（modernist）の間で起こっているものである。「基要派」は信仰の基本的な要道に立ち、聖書は神によって啓示されたものと信じ、聖書に記されていること、すなわちキリストが処女より生まれ、この地上で伝道していた時に多くの神的奇跡を行い、ゴルゴタの丘で人類のために命を捨て血を流し、救済の大きな御業を成就し、死後三日目にその体は復活し墓から出て、四〇日後に天に昇り、神の右の座に座し、将来この地上に再臨し、彼の弟子を迎え、彼らを復活させて霊的で死ぬことのない体を与え、彼〔キリスト〕が復活した後の栄光の体と似たものとし、そして地上に審判を下し、最後には天の国を建ててくださる、と信じている。しかし、「現代派」はこれらの要道を信じていないのだ。にもかかわらず、彼らは自分たちが信じていないということを自分たちで分かっておらず、曖昧で不明確かつ似非的解釈でこれらの要道を講解しようとする。彼らは、自分たちはこれらの要道を信じていないのではなく、信じているのだが、自分たちの解釈は「基要派」の解釈と異なっているに過ぎない、と言う。[40]

また、王明道は呉耀宗の著書『黒暗與光明』（一九四九年出版）を読んだ際、「この種の無信仰の人物が教会指導者と呼ばれるとは、嘆かわしい、嘆かわしい」[41]と日記に綴っている。つまり王明道は、呉耀宗をはじめとする現代派は「聖書の解釈が異なっている」という程度の差異の範囲を越えており、そもそも聖書を信じていない無信仰の「不信派」である、と考えていたのだ。[42]

王明道のこうした信仰的姿勢は、さまざまな圧力の中で動揺していた他の教会指導者たちの信頼を集め、彼は三自教会を支持しない人々の精神的支柱となった。[43]

㈡　王明道の三自教会批判

五四年一二月、王明道は『霊食季刊』に「人に従うのか？　神に従うのか？」「真理か？　毒素か？」と題する文章を掲載し、呉耀宗を中心とする三自教会に対して激しい批判を展開した。王明道は呉耀宗たちを指して「不幸なことに、最近ここ数年、サタン〔悪魔〕が教会の中に紛れ込んできた偽信徒たちを利用している。……彼らは信仰によって受け入れるべき聖書の中のすべての真理を曲解している。……彼らは神の聖なる言葉を破壊し、多くの人の信仰を破壊している。彼らは偽信徒であり、偽預言者であり、教会を害している」[44]と三自教会の指導者たちを痛烈に批判している。また三自教会が「教会は「帝国主義思想の毒素」を取り除いて欧米の教会と断絶すべきである」と主張しているのに対して、王明道は「それは「帝国主義思想の毒素」などではなく、「聖書の中の真理」である。……

自分はキリスト者であり神の僕であると自称しながら、「聖書の中の真理」を「帝国主義思想の毒素」であると称するような類の人が、一体いかなるキリスト者であるのか本当に分からない。一体「どの神」の僕となってしまったのか[45]」と、同運動の指導者が聖書の真理を擁護していないことに対して激しい怒りをあらわにしている。これらの文章は大きな反響を呼び、三自教会に一度は加盟した教会が相次いで脱会する動きが全国的に見られたほどだった[46]。

こうした王明道の主張に対して三自教会も機関誌『天風』に反論を掲載し、「キリスト者が反帝愛国運動に参加するのを拒絶する聖書的根拠はなく、それこそ帝国主義思想の毒素から出ているものだ[47]」と王明道を攻撃し、丁光訓[48]、崔憲祥[49]、汪維藩[50]などが相次いで「キリスト教は反帝愛国という点において団結すべきである」と主張した[51]。しかし王明道はなおも三自教会批判のトーンを緩めることなく、五五年六月、後に「反三自運動の古典[52]」といわれるほど有名になった「我們是為了信仰」（我ら信仰のゆえに）を『霊食季刊』に掲載した。王明道はこの中で三自教会の指導者の主張の一つひとつを取り上げて、それらに対して徹底的な批判を加えたうえで、次のような言葉で締めくくっている。

我々の信仰上の立場は、聖書の中にある真理であればすべて受け入れて守るが、聖書の中にない事柄は完全に拒絶する、というものである。我々の神に対して忠実であるためならば、我々はいかなる代価を払うことも、またいかなる犠牲を払うことも厭わない。いかなる歪曲も事実無根のでっち上げも、我々を脅かすことはできない。人の口は人の頭にあり、言おうと思えば〔事実ではないことも〕何でも言えてしまうが、しかし事実は永遠に事実であり、神がそれをはっきりと見ておられるだけでなく、神に属する人もまたそれをはっきりと見ている。他の人がどんなに〔事実を〕歪曲し、どんなに〔我々に関して〕ありもしないでっち上げを言おうとも、我ら信仰のゆえに〔事実を歪曲することはできない[53]〕！

王明道は「我ら信仰のゆえに」を執筆した後、基督徒会堂の学習会や説教でしばしばそれについて触れ、さらには同文を単行本として五千冊出版して教会員に配布するなどし、「偽預言者」を警戒するようにと繰り返し警告した[54]。

㈢　三自教会と政府当局による王明道批判

五四年七月から八月にかけての中国基督教第一回全国会議において、呉耀宗は三自革新運動のそれまでの四年間を総括する報告をおこない、同運動には拙速な面があり、一部の人々から十分な理解と支持をえることができなかったことを認めたうえで、こうした欠点を今後改善していく方

針を打ち出した。[55] 同会議の期間、改善方針を受けた三自教会の著名な指導者が相次いで王明道を訪問し、同会への加盟を説得しようとしたが、王明道は「彼らと話すことは何もない」と顔を合わせることさえ拒絶した。[56]

政府当局は王明道が「反対派の旗幟」となっており、彼の「反動」の影響が拡大することを懸念し始めていた。[57] そのため全国会議の終了後、政府当局は「基督徒会堂の上層反動分子〔王明道〕は愛国でなく、団結もせず、政府に対抗する反動政治の顔を持っている」という内容の「王明道特別問題に関する伝達報告」を全国の関係部局に通達し、王明道を政治的に孤立させる方針を取り始めた。[58] また五五年二月に北京で開催された「第三次全国宗教工作会議」において、政府当局は王明道の基督徒会堂が単純な一宗教組織ではなく帝国主義と国内反動階級と密接な連絡をもった組織であり、三自愛国運動の展開を妨げるのみならず国家建設事業における躓きの石であり、したがって主要な闘争対象である、と見なしていた。[59] 当時、国務院秘書長兼国務院機関党組書記だった習仲勲は、特に王明道の基督徒会堂や倪柝聲の聚会処に対して反帝愛国統一戦線政策を展開するよう指示し、「王明道を逮捕し、王明道の反動的のさばりを叩いて弱らせ、王明道の各地に対する影響を縮小させる」という方針を固めた。[60]

政府当局がこのような方針を明確にした後、王明道が逮捕されるのはもはや時間の問題だった。同年三月から五月にかけて、前述のように三自教会側の丁光訓、崔憲祥、汪維藩などが『天風』において相次いで王明道批判を展開し、それに対して同年六月に王明道が「我ら信仰のゆえに」を『霊食季刊』に公表し反駁すると、三自教会側はやはり『天風』において王明道批判を激化させた。

同年七月一一日付の『天風』の社説「団結を強化し、是と非を明らかにする」は、今や信仰の違いという「小異」ではなく反帝愛国という「大同」によってキリスト教が団結すべき時であるが、王明道は「三自愛国運動を破壊している」と指摘している。その上で、王明道が『霊食季刊』に公に発表していた「真理か？　毒素か？」や「我ら信仰のゆえに」などを逐一取り上げ、「王明道氏は人を批判することで身を立てており、彼の説教の中には多くの誹謗があり、祈りは呪いで満ちており、その文章はすべてを破壊するものだ」と批判を加えている。そして王明道は「中国人民の罪人であり、教会の罪人であり、歴史の罪人である！」と弾劾し、最後には彼の「我ら信仰のゆえに」という言葉を逆手にとって、次のように結んでいる。

我ら反帝愛国のゆえに！　……我々は反帝愛国の政治原則のゆえに王明道氏と是と非の境界線を明確にしなければならない。すべての愛国愛教のキリスト者はこの闘争に積極的に加わるべきである。中国キリスト教

による三自愛国運動は正義であり、正確であり、必要であるからには、いかなる敵もこれを破壊することはできない！[61]

この時期は中国政治の舞台では「胡風事件」を契機に隠れた反革命分子に対する徹底粛清がおこなわれた時期でもあり、三自教会は王明道を「反革命分子」と断罪し、『天風』[62]において波状攻撃のように更なる批判を加えていった。

㈣　王明道の逮捕・自己批判・再逮捕

五五年八月七日が王明道の基督徒会堂における最後の一日となった。当日午前、王明道は「彼らはこのようにしてイエスを陥れた」と題する説教で、忠実に神に仕える人を陥れる「ユダの弟子」を非難する内容を約八百人の会衆に対して語り、また夜の集会後には二百人の会衆に[63]「我ら信仰のゆえに」の単行本を一冊ずつ配布した。

八月八日未明、王明道とその妻・劉景文は自宅に押し入って来た公安により逮捕され、同時に基督徒会堂の他の中心的信徒や王明道と近い関係にあった他の教会の指導者など約二〇人も一斉に逮捕された。[64]王明道逮捕直後の八月一五日付の『天風』には「王明道の反動言行を暴く」（短評）、「著書『五十年来』から見える王明道はいかなる人物か」（天風資料室）、「「信仰」という偽装で人を騙すことはできない」（崔憲祥）、「王明道に厳正に告げる」（丁光訓）など、王明道批判特集とも言える内容が二〇ページにわたり掲載された。[65]三自教会は、王明道が「帝国主義を愛し、帝国主義の中国侵略に従い、祖国人民の反帝愛国運動を骨髄に徹するほど憎み、今日では特に中国キリスト教の三自愛国運動を敵視している」と批判した上で、教会の中には少数ながら王明道と同じ「路線」を取る者があることを指摘し、こうした反動的・反人民的路線に固執する者は王明道と同様に人民の中で滅びていくであろう、と警告している。[66]

王明道の逮捕から間もなく、やはり三自教会に批判的だった広州の林献羔[67]も「王明道分子」として逮捕された。[68]こうした王明道と「王明道分子」の逮捕は、三自教会に加盟することを拒否していた他の教会指導者・信徒に対して大きな威嚇効果となった。王明道が不在となった基督徒会堂は別の信徒指導者の主導により三自教会に加わり、また上海の倪柝聲系統の教会が自発的に三自教会に加わるなどした。[69]政府当局は王明道の一件を彼「個人」の案件としてではなく、反革命的な「路線」「集団」の問題へと拡大させ、三自教会に批判的な抵抗勢力を一掃したのだった。

王明道は逮捕直後、三自教会に反対するのは「信仰の問題」であり、犯罪とは関係ないと主張し続けたが、政府当局は既に三自教会に反対することは「反革命罪」にあたると断定していた。当局は数十回にわたる尋問を通して、政

府に対する「十二の罪状」の自白を王明道に強要し、彼は自己批判書を書くように追い詰められた[70]。こうして王明道は三自教会に加わることを約束した上で、自己批判書を書き、四一九日間の拘留から解かれ、五六年九月二九日に釈放された。

釈放直後、王明道は北京の三自教会の主席・王梓仲[71]に呼ばれ、百人ほどの関係者の前で三自教会加盟の「歓迎」を受け、彼はその場で釈放時に書かされた自己批判書を読み上げることを強要された。この自己批判書は後に「我が自己批判」と題して『天風』に掲載されるが[72]、その冒頭は「私は反革命の罪行を犯した者ですが、政府の忍耐強い教育により自身の誤りを認識するに至りました。政府の寛大なる処置を受けることができ、私は罪悪の深淵の中から救い出され、心はとても感激しております」と始まり、「宗教の形式を借りて行った反革命活動」について次のように続いている。

私が犯した罪は厳重な罪行です。私が犯したこれらの多くの罪行は、決して何らかの信仰上の問題ではなく、共産党と人民政府に敵対する思想が〔私に〕あったからです。これらの反動思想の由来は、一方では長年にわたり反動派の宣伝の影響を受けてきたからであり、……他方では私が長年にわたり帝国主義分子と常に接触し、彼らの毒素を受けてきたからです。……〔四九年の〕解放後、私はこのような反動思想を依然として改めることをせず、共産党と人民政府に対して常に一種の対立思想を抱き、現実を見ようとせず、政府の多くの良きことを悪しきことと見なしてしまい、さらには多くの人に影響を与え、多くの人に害毒を与えてしまいました。

そして最後は「キリスト教内の大団結」と「反帝愛国運動」に参加し「真に国を愛する人、社会を愛する伝道者」となることを誓い、「三自愛国運動に参加している伝道者およびこの運動の指導者に対する謝罪」を述べて締めくくっている[73]。かつて三自教会に断固として反対してきた王明道にとって、この「自己批判」は完全な敗北宣言だった。

しかしその後、王明道は自分が虚偽の自白や自己批判をしてしまったことを後悔し、自分には伝道者としての資格がないと考えるようになった。彼は自分が設立した基督徒会堂とも関係を絶ったが、実際には三自教会に加わることもしなかった。王明道は再逮捕を恐れながら悶々とした日々を過ごしていているうちに、五八年四月二九日に反革命行為を継続していた容疑で妻・劉景文とともに再逮捕されるに至った[74]。

数年の拘留と取り調べの後、六一年四月に北京市人民検察院は「一九五六年に我が政府が寛大な処置を与えたにもかかわらず、被告は悔い改めることを知らないばかりか、

反革命の破壊活動を継続し、その罪行は極めて重く、教育を経ても改まりようのない反革命分子である」とし、「懲治反革命条例」に基づき王明道夫婦を正式に起訴した。[75]その後、六三年七月に北京市中級人民法院は「反革命罪」で王明道に無期懲役刑、劉景文に懲役刑一五年の判決を言い渡した。[76]王明道はすぐに上訴したが、二か月後に北京市上級人民法院により上訴は退けられ、最終判決が確定した。[77]後に彼は一度目に逮捕された五五年から無期懲役を受けた六三年までを「惨めな失敗の八年間」[78]と形容している。

㈤　文化大革命期の中国キリスト教

五〇年代初頭、中国共産党政権下での活路を模索していたキリスト教の諸教派の教会は、三自教会に加盟し、反帝愛国の旗の下でその存続を図ろうとしていた。しかし五八年になると、こうした「教派」は帝国主義の侵略のための道具の残滓であり、社会主義路線を阻害するものであるため改革する必要があると批判されるようになった。政府当局は、教会指導者に対する社会主義教育の強化、労働生産や労働鍛錬への参加を強制し、さらには、「連合礼拝」の実施と称して教派を解体させていった。多くの教会を閉鎖する仕方で「教会合同」が強引に推し進められ、上海では二百カ所近くあった教会が八カ所に、北京では六六カ所あった教会が四カ所に、広州では五二カ所あった教会が一カ所に縮小・制限された。[79]またキリスト教教育機関に関しては、金陵大学や燕京大学など一三のキリスト教大学をはじめ、その他の小学校から高等学校にいたるすべてのキリスト教学校が、五六年までにはすべて政府に接収されたり、あるいは公立学校との合併が推し進められたりした。[80]牧師などの伝道者養成のための神学校は五二年に統廃合が推し進められ、華東地域の十数の神学校が金陵協和神学院に合併、華北地域の三つの神学校が燕京協和神学院に合併、その後五六年には華北地域のその他一一の神学校が燕京協和神学院に吸収合併された。このように合併することにより存続が許されてきた南北二つの協和神学院だったが、「大躍進」の時期の三年間は休校を余儀なくされ、その後六一年には再開されたものの、すぐに両校の合併が決定し、公に存続が許されたのは金陵協和神学院のみとなった。[81]

六六年、文化大革命が始まると、宗教を管理・統括していた統一戦線部門や宗教事務局も解散させられ、キリスト教に限らずすべての宗教組織の活動が停止を余儀なくされた。キリスト教に関しては、三自教会の主席だった呉耀宗でさえも公開批判にさらされ、[82]三自教会に加盟していた教会であっても礼拝堂が占拠・接収され工場に転用されたり、また紅衛兵により聖書や讃美歌が焼かれたり、オルガンが破壊されたりした。[83]また三自教会の指導者であって

も、その多くが労働改造所や農村へ下放させられたり、批判闘争に晒されたり、投獄されたりし、中には精神異常をきたし、自殺に追い込まれた者もいた。[84] 文化大革命はキリスト教にとっても「死の陰の谷」（聖書：詩編二三編四節）を歩む苦難の時代だった。

㈥　文化大革命期の王明道とその「再起」

王明道は五八年に逮捕され六三年に無期懲役の判決を受けるまで北京市内に収監されていたが、六六年には山西省大同、六八年には山西省蔭営の労働改造所に移管された。彼は八〇年に釈放されるまでの期間、「反革命罪」の罪人として収監され、時に激しい糾弾を受けることもあった。[85] しかし収監当初には肺病を患っていたため監獄病院の一人部屋で静養することができた。[86] また彼は耳が悪く他の囚人と一緒に政治学習に参加したり労働したりすることが困難だったため、自分で新聞を読んで学習する「自習」が認められていた。[87] さらには、上海に住んでいた王明道の息子・王天鐸が五百冊ほどの書籍を彼に送ってくれたため、彼は目を悪くするほどまでに多くの読書をすることができ、監獄の政府役人たちが彼の書籍を借りに来るほどだった。[88] 壁の外では文化大革命の嵐が吹いていた期間を含む二〇年間の投獄の期間、意外なことに王明道は監獄の中で比較的落ち着いた日々を過ごすことができていたのだった。王長新はこのことを「神が監獄を用いて彼〔王明道〕の命を守ってくださった」「神が彼〔王明道〕をこのような環境の中に匿ってくださったことにより、彼は〔外の〕社会で生活するよりもおそらくより安全だっただろう」と記している。[89]

また六三年に無期懲役の判決を受けた後、信仰的・精神的に完全敗北をしていたはずの王明道は「再起」を経験している。無期懲役刑が確定した当初、彼は虚偽の罪に陥れられたことに対する憤りと、自分自身がここまで失敗してしまったことに対する恥辱から、もはや「ただ座して死を待つのみ」という悲観的・絶望的な心境に陥り、「神よ！私をこのような攻撃に遭わせ、無期懲役にさせるなど、なぜあなたはこんなにも残酷なのか」と祈るほどだった。しかし、若き頃に暗唱した次の聖書の言葉を思い起こし、心を奮起させた。

> しかし、わたしは主を仰ぎ、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる。わたしの敵よ、わたしのことで喜ぶな。たとえ倒れても、わたしは起き上がる。たとえ闇の中に座っていても、主こそわが光。わたしは主に罪を犯したので、主の怒りを負わねばならない、ついに、主がわたしの訴えを取り上げ、わたしの求めを実現されるまで。主はわたしを光に導かれ、わたしは主の恵みの御業を見る。（旧約聖書：

ミカ書七章七―九節、『新共同訳聖書』より）[90]

王明道は自身のこの「再起」を、後に次のように回想している。

この数節の聖書の言葉は、私が大きな罪を犯してしまっていたこと、神に対して罪を犯してしまっていたことを気づかせてくれました。私は神の前で罪を認めるのと同時に、私が以前に認めてしまった嘘の罪状のすべてを時間をかけて翻す機会を与えてくださいと祈りました。神は私を憐み、私の祈りを聞いてくださいました。……私は一〇ヶ月の時間をかけ、私の心に思うことを書き、もともと存在しない私の罪状をすべて撤回しました。その時、神が与えてくださった平安と喜びと力が再び私の体に戻り、私は再び立ち上がることができ、弱さが強さへと変えられ、失敗が勝利に変えられました。[91]

王明道はこれまでの供述内容は「三自教会に反対した」ということ以外はすべて恐怖ゆえについてしまった虚偽の証言であり、自分は国の法律を一つも犯してはいないと主張する膨大な量の供述撤回書を書き、監獄長にすべて提出した。[92] 彼のこの供述撤回書が受け入れられることはなかったが、このことは彼自身にとっては「惨めな失敗の八年間」から立ち直り、それ以前と同様の頑強な信仰と精神を取り戻す「再起」の大きな契機となった。

三　王明道の釈放と名誉回復申告書

㈠　文化大革命の終結後の中国キリスト教

七六年は毛沢東や周恩来の死去、四人組の逮捕など一つの時代の終焉と新しい時代の幕開けとなった。実権を握った鄧小平により改革・開放政策がとられ、政治改革・経済改革が推し進められていく中で、八二年には中国共産党中央書記処が宗教政策に関する重要文書「我が国の社会主義時期の宗教問題に関する基本観点と基本政策」（通称「十九号文件」）を発表した。そこでは宗教がやがては消滅するという従来のマルクス主義的宗教観を継承しつつも、過去の急速な強制的手段による消滅政策は誤りであったことを認めた上で、今後は長期的政策として宗教信仰の自由を保障し、社会主義建設と祖国統一のために宗教の積極的要素も活用するという方針が盛り込まれた。同文書ではプロテスタントの信徒数が三〇〇万人とされており、四九年の建国時の七〇万人から文化大革命以後には四倍以上の増加となっていた。[93]

このような一定の宗教寛容政策に舵が切られたことに伴い、諸宗教もその活動を再開していった。下放されたり投獄されたりしていたキリスト教界の指導者たちも教会に戻り、七九年の寧波や上海などでの礼拝復活を皮切りに、各

地の教会が活動を再開させていった。八〇年には第三回全国基督教大会が開かれ、従来の中国基督教三自愛国運動委員会に加えて「中国基督教協会」(China Christian Council)が新たに設置された。[94] 八〇年代には金陵協和神学院をはじめとする神学校が各地で再開あるいは新設され、三自教会は伝道者育成にも力を入れ始めた。[95] 八〇年代末までには全国で六千カ所以上の教会、約二万六百カ所の集会点が建てられるまでになった。[96]

三自教会に所属する教会の活動が再開された一方で、同会になおも加盟しない家庭教会が農村を中心に拡大していった。[97] また文化大革命期に投獄されていた北京の袁相枕、[98] 上海の謝模善、[99] 広州の林献羔など、家庭教会の指導者たちも相次いで釈放され、都市部においても三自教会への加盟を拒絶し続ける家庭教会が徐々に根付いていった。[100]

(二) 王明道の釈放

七九年一一月、王明道にも山西省高等法院より釈放許可が出され、王明道の息子・王天鐸は父親を引き取りに来るようにとの電報を受け取った。王天鐸が山西省の蔭営監獄に到着すると、王明道は自身の「冤罪」が明確に晴らされていないとし、政府が彼に対して逮捕・判決・投獄の三つの過ちを犯したことを認めない限り、自分は出獄しないと頑強に主張した。当局はこのことへの対応に苦慮したが、最後には北京法院が王明道の案件を再調査に来るので監獄外の仮住居に移るようにと促し、王明道に出獄を了解させるという一計を案じた。しかし彼は既に目や足が不自由であり、仮住居で一人生活ができる状況ではなく、息子がいる上海に移り住むことに渋々同意した。こうして彼は二〇年以上におよぶ獄中生活から半ば「騙される」形で出獄したのだった。[101]

王明道の釈放の知らせは、中国内外にすぐに広まり、多くの人々が上海の彼のもとを訪ねてきた。彼の著書が投獄されている期間に香港や台湾で再版されていたため、出獄した時には彼の名前は以前よりも広く知れ渡っていた。カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、西ドイツ、デンマーク、オランダ、ノルウェー、スウェーデン、スイス、フィンランド、日本など各国の教会関係者の来訪も相次ぎ、[102] 八八年には世界的に著名なキリスト教伝道者ビリー・グラハムも王明道を訪ねている。[103]

当局は王明道の影響力の大きさを恐れて常に監視役を置いていたが、彼が八四年以降に家庭で独自に主催するようになった三、四〇人の集会は実質上、黙認し続けた。彼は釈放後も一貫して三自教会とは距離をとり、かつて親しかった友人であっても三自教会に加わった者たちとの交流はあえて絶つ姿勢を貫いた。[104] 王明道は、活動再開をした三自教会は以前の三自教会と内実が同じであり、たとえ語り

口調を変えて信仰的な内容を語っているようであっても、結局は「不信派」（不信者）が「偽信派」（偽信者）に変わっただけであると、なおも痛烈に批判していた。[105]

㈢　名誉回復申立書

八〇年の三自教会の第三回全国基督教大会が開催された時、王明道は既に釈放されていたが、同大会の講話の中で統一戦線工作部の副部長・張執一が王明道を「外国反動勢力の走卒」[106]と呼ぶなど、彼は釈放後も名誉回復がなされないままだった。彼は釈放時にも政府に対する謝罪要求をし、冤罪を晴らそうと願いながらもそれが適わなかったため、自身の名誉回復がなされることが彼の晩年の念願となった。彼は目が不自由になっていたにもかかわらず、中国最高人民法院院長・江華に宛てて名誉回復を求める長文の文書を書き、また息子・王天鐸の助けも借りて八一年と八六年に「王明道反革命案件再調査請求申立書」（以下、「申立書」）を作成した。[107]

申立書では再調査請求の理由を、次のように述べている。

> 王明道の案件はキリスト教界における一大案件であり、関係する者が極めて多く、刑を受けたものは数十人にのぼり、審査を受けたり、影響を受けたりしたものはさらに多い。この案件の処理が適切になされるか否かは、これらの人々、本人、およびその親族に影響を与え、また党と政府の宗教政策の貫徹にも影響を与えるものである。[108]

八一年の申立書では、かつて無期懲役の判決を受けた際に列挙された罪状に触れ、はたして王明道が「キリスト教の伝道に従事する伝道者であったのか、または党や政府に反対する政治活動に従事する反革命分子であったのか」、また「「三自愛国運動」組織に参加せず、「三自愛国運動」のある指導者たちに反対することが違法や犯罪として成り立つか否か、特に反革命罪として成り立つか否か」が鍵となる問題であると指摘している。[109]また八六年の申立書でも、「三自愛国運動はキリスト教界の自主参加の組織に過ぎず、参加するもしないも、賛成するも反対するも、いかなる法律にも違反しておらず、ましてや反革命に関連することもない」と再度強調している。[110]

王明道は三自愛国運動（三自教会）に加わらないことが、決して「非愛国」を意味するわけではないとして、江華に宛てた文書の中で次のように述べている。

> 私は説教や著作の中で、これまで「愛国」という二文字を使ったことはありません。それは『聖書』、『四書』、また中国古代の賢人たちの著作の中にもこの言葉が触れられていないからです。彼らはただ「人を愛すること」を説いていただけでした。……「国」とは何でしょうか？　それは複数の人によって成り立つも

のではないでしょうか？　もし広大な土地に「人」がいないならば、その土地を「国」と呼ぶことができるでしょうか？　「人を愛する」者が国を愛さないでいられるでしょうか？　私が説教で語ってきたことや書いてきた文章は、いずれも人に貢献し、有益であるのに、どうして私が国を愛していないなどといえるのでしょうか？[11]

また王明道は江華への文書の中で「私が二三年の長きにわたって二度投獄されたのは、純粋に信仰のゆえでした」[12]と記し、それが決して政治問題ではないことを訴えている。

このように、王明道が願っていたのは、彼の名誉回復を通して、第一に、彼に連座させられる形で反革命罪に問われた人々の名誉回復がなされること、第二に、信仰的理由による三自教会への非加盟が決して違法ではなく、また非愛国を意味するわけではないと訴えることだった。

結論――王明道の名誉回復と家庭教会の合法化

王明道が五〇年代以来、三自教会へ加盟することを拒絶してきたのは、決して政治的に国家や党に敵対するためではなく、あくまで三自教会の指導者と自身の信仰が異なるという「信仰のゆえに」という理由だった。五六年には一度、「我が自己批判」の中で自身が政治的な「反革命罪」であることを認めてしまったが、後に六三年に終身刑が確定してからはそれを撤回し、八〇年に釈放されて以降は自身の案件の再調査と名誉回復を求める申立書を作成し、それを提出する準備をしていた。この申立書は妻・劉景文の反対により王明道の生前には提出されず、王明道と劉景文の死後、彼らの息子・王天鐸が二〇〇〇年になってようやくに正式に提出したが、棄却されてしまった。

九七年、中華人民共和国刑法の改訂の際、「反革命罪」は「国家安全危害罪」へと改正され、「反革命罪」は歴史上の用語となった。[13]それにもかかわらず、なぜ王明道の「反革命罪」は再調査も名誉回復もされないのか。邢福増は次のように分析している。

中共中央が一九五五年から五六年の間に関わった基督教〔プロテスタント〕と天主教〔カトリック〕の三つの〔王明道、倪柝聲、龔品梅〕重大「反革命集団」案件に対する結論を今に至るまで変えていないのは、「判決の覆し」は一連の歴史問題に対する再評価にまで及ぶことが避けられず、それは現在の当局公認宗教組織[14]の権威と地位を動揺させ、社会の安定維持に不利だからである。[15]

こうしてみると、王明道の名誉回復がなされない理由と、冒頭で触れた守望教会が独自に合法的登記を試みたが当局に受け入れられず厳重に取り締まられた理由、そして

守望教会事件直後に同教会を支持する他の家庭教会の指導者たちが王明道の「反三自の古典」ともいえる文章のタイトル「我ら信仰のゆえに」を用いて政府に対する請願書を書いた理由が、それぞれに関連していることが見えてくる。

都市型新興家庭教会の代表である守望教会が三自教会の枠組み以外で合法的登記を認められることになれば、それは三自教会の正当性を弱めることになり、延いてはこれまでの政府の宗教政策の失策を認めることになり、政府の権威低下にもつながりかねない。また守望教会は三自教会に加盟しない理由を明確にした「我々はなぜ三自愛国会に加わらないか」という一文の中で、王明道の「我ら信仰のゆえに」を引き合いに出して、「種々の損得を見るのではなく物事の本質を見極める王明道氏の姿勢が、神の御心に適っていたことは歴史が証明している」[16]と評価しており、こうした守望教会の正当性を認めることは王明道の正当性を認めることにもなってしまう。「王明道と家庭教会は中国における神の栄光の証し」[17]とまで言われているように、王明道は守望教会をはじめとする家庭教会の象徴的代名詞ともなっているのだ。[18]つまり、家庭教会の合法化がなされない限り、王明道の名誉回復はなく、また王明道の名誉回復がなされない限り、家庭教会の合法化はないと言えよう。換言するならば、王明道の名誉回復がなされる時は、すなわち家庭教会の合法化が認められる時なのだ。

中国のキリスト教界を代表する神学者・王艾明[19]は、三自教会と家庭教会をめぐる複雑な問題に関して次のような提言をしている。

私が提示する根本的解決方法は、憲法を基礎として自治的教会〔家庭教会〕の建設が許可されること、そして政教分離という憲法的原則の下で、宗教局の役割と権限が中国の法的制約と監督を真に受けるようになることです。一九五〇年初頭の革命政党に起源を持つ宗教政策は世界的に重要な位置を占める大国の政権政党の宗教政策へと転換されるべきです。[20]

こうした家庭教会の合法化の主張は、神学者の王艾明のみならず政治学者・社会学者の劉鵬[21]や于建嶸[22]なども提言しており、今日ではこの主題を議論することそのものは以前ほど敏感ではなくなってきている。しかし、その提言が実際の宗教政策に反映される兆しはなく、昨今は宗教事務条例が改訂され、宗教統制がより一層厳しさを増している傾向にある。

王艾明が指摘するように、家庭教会の合法化は中国政治が憲法を基礎とする憲政体制を確立し、それに基づく政教分離が実施されるのを待たなければならない。[23]したがって王明道の名誉回復も当面の間は見込めないが、王明道評価は中国政治、特に宗教政策の現状を見定めるリトマス紙として今後も注視する必要があるだろう。[24]

注

〈1〉 劉鵬『普世社会科学文選二〇一一年』（内部資料）、北京：普世社会科学研究所、二〇一一年、七五－七六頁。

〈2〉 中国共産党政権下におけるカトリック教会（天主教）の歴史に関しては、本稿で扱える範囲を越えるため、別途論じる必要がある。ここでは以下の参考文献を提示するにとどめる。劉建平『紅旗下的十字架――新中国成立初期中共対基督教、天主教的政策演変及其影響（一九四九－一九五五）』香港：基督教中国宗教文化研究社、二〇一二年。Mariani, Paul P, *Church Militant: Bishop Kung and Catholic Resistance in Communist Shanghai*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2011.

〈3〉 劉鵬『中国基督教家庭教会問題研究報告（二）』（内部資料）、北京：普世社会科学研究所、二〇一五年、一頁。

〈4〉 「三自」とは、二〇世紀初頭から推奨されてきた欧米宣教団体からの自立運動の中で用いられた「自治」（政治的・行政的自立）、「自養」（経済的自立）、「自伝」（伝道活動における自立）を指す。「中国基督教三自愛国運動委員会」は各教会の連盟的教会群の総称である。八〇年に「中国基督教協会」が新たに設立されると、同委員会と同協会は合わせて「両会」と呼ばれるようになる。この二つの組織はあくまで「委員会」（committee）また「協会」（council）であり、一つの教派的な「教会」（the church）ではないが、五〇年代以降に同委員会に所属するようになった教会群、また八〇年代以降の両会に所属するようになった教会群を指して「三自教会」あるいは「三自愛国教会」という通称が使われることが多くある。「教会」ではないことを明確にする意味で、「三自会」「三自愛国会」という呼称が使用されることもあるが、本稿では便宜上、「三自教会」という呼称を用いることとする。

〈5〉 国家宗教事務局「中国宗教概況」http://www.sara.gov.cn/old/zwgk/17839.htm（二〇一七年一一月二八日閲覧）。二三〇五万人という数字は中国社会科学院が二〇一〇年に発表した調査結果に基づくものだが、その内訳は受洗者（洗礼を受けている者）が約一六〇〇万人、未受洗だが自分は信仰を持っていると自認している人が約七〇〇万人となっているため、正確な数字とは言えない。三自教会が最近公表した二〇一二年の統計人数は受洗者だけで二五〇〇万人以上とされており、中国社会科学院の数字とは大きくかけ離れている http://news.ifeng.com/a/20160527/48863101_0.shtml（二〇一七年一一月二八日閲覧）。

〈6〉 「家庭教会」は三自教会に所属しない教会群の総称であり、一つの教派的な「教会」（the church）を指すわけではない。これは教会堂ではなく家庭で集会を守っていたことに由来する呼称である。今日ではオフィスビルなどで集会をする教会も見られるようになったが、歴史的な経緯から、非三自教会を指して通称「家庭教会」と呼ぶことが一般的となっている。

三自教会や家庭教会の概説は以下の拙稿を参照。「中華

人民共和国におけるキリスト教――一九四九年から現在まで」石川照子・桐藤薫・倉田明子・渡辺祐子・松谷曄介『はじめての中国キリスト教史』かんよう出版社、二〇一六年、一九一－二一七頁。「「三自教会」とは何か」『福音と世界』二〇一四年一〇月号、新教出版社、四－五頁。「「家庭教会」とは何か」『福音と世界』二〇一四年一二月号、新教出版社、四－五頁。

〈7〉 Pew Research Center's Forum on Religion & Public Life Global Christianity, December 2011, www.pewforum.org/files/2011/12/ChristianityAppendixC.pdf（二〇一七年一一月三〇日閲覧）。

〈8〉 こうした都市型新興家庭教会に関しては以下の研究を参照。鄞穎翹『北京新興家庭教会研究』香港：建道神学院、二〇一三年。劉同蘇・王怡『観察中国城市家庭教会』台北：基文社、二〇一二年。

〈9〉 守望教会が三自教会への加盟を拒否する理由は孫毅「我們為何不加入〝三自〟愛国会」（『杏花』二〇一〇年第三期、八九－九五頁）を参照。

〈10〉 三自教会への登記でもなく、また従来の非合法のままの家庭教会にとどまるのでもなく、家庭教会として別個に登記申請をする路線は「第三の道」とも呼ばれている。

〈11〉 守望教会事件については、二〇一六年度アジア政経学会秋季大会の自由応募分科会5「キリスト教と中国政治」において、筆者が「北京守望教会の神学思想――特に教会論を中心に」と題して報告。論文は未脱稿。

〈12〉 謝模善ほか「我們是為了信仰――為政教衝突致全国人大的公民請願書」余杰・王志勇編『公民抗命與家庭教会』台北：基文社、二〇一五年、一八二－一八五頁。

〈13〉 賴恩融（Lyall, Leslie）『中国教会三巨人』張林満鎂ほか訳、台北：橄欖文化事業基金会出版部、一九八四年。

〈14〉 邢福増編著『王明道的最後自白』香港：基道出版社、二〇一三年、vii－viii頁。

〈15〉 「中華基督教団」についての概要は拙論「矢内原忠雄と中国――「国家の理想」から王明道訪問へ」（『社会システム研究』第二五号、立命館大学、二〇一二年）及び拙論「福音は日本と中国のはざ間の波濤を超えられるか？――日中キリスト教関係の回顧と展望」（『神学』七七号、東京神学大学、二〇一五年、一四八－一七七頁）を参照。

〈16〉 王明道の中華基督教団加盟への抵抗については、王明道『五十年来』（台湾新北：橄欖出版、二〇一二年、一五九－二〇〇頁、第五章「作全群的監督」）、邢福増「王明道與華北中華基督教団――淪陥区教会人士抵抗與合作的個案研究」、同著『衝突與融合――近代中国基督教史研究論集』（台北：宇宙光出版社、二〇〇六年、一〇三－一七四頁）を参照。

〈17〉 王明道に関する中国語圏における代表的な研究は、呉利明『基督教與中国社会変遷』（香港：基督教文藝出版社、一九八一年、一五八－一六三頁）、邢福増、前掲「王明道與華北中華基督教団――淪陥区教会人士抵抗與合作的個案研究」、邢福増編著、前掲『王明道的最後自白』など

があげられる。しかし王明道は中国大陸では未だに名誉回復がされておらず、政治的にタブーな存在であるため、中国大陸の研究者の王明道に関する論文・著作は中国大陸では公に出版することができないのが現状である。日本では王明道の代表作『五十年来』といくつかの論稿を編集した『生命の冠――中国キリスト教界指導者の闘い』（暁書房、一九八七年）があるが、中国語原文からの翻訳ではなく、英訳からの和訳だったため、不正確な箇所が多くみられる。

〈18〉倪柝聲（Ni Tuo-sheng, 1903–1972）：中国の土着教派「基督徒聚会処」の創始者。同教派は「小群」「地方教会」とも呼ばれる。五二年に逮捕、五六年に「倪柝聲反革命集団」として弾劾され、七二年に獄中で死去。

〈19〉龔品梅（Gong Pin-mei, 1901–2000）：中国カトリック教会の上海司教区の司教、枢機卿。五五年に、「龔品梅反革命集団」として弾劾され逮捕、六〇年に反革命罪で無期懲役。八八年に釈放、渡米、二〇〇〇年にアメリカで死去。

〈20〉周恩来「発揮人民民主統一戦線積極作用的幾個問題」中共中央文献研究室編『建国以来重要文献選編』第一冊、北京：中央文献出版社、一九九二年、一八六頁。

〈21〉「中共中央関於天主教、基督教問題的支持」前掲『建国以来重要文献選編』第一冊、四〇八－四一一頁。

〈22〉呉耀宗（Wu Yao-zong, 1893–1979）：アメリカのユニオン神学校とコロンビア大学に留学、帰国後は上海のＹＭＣＡで働く。中華人民共和国建国後、中国基督教三自愛国運動委員会の主席。呉耀宗についての研究は、梁家麟『呉耀宗三論』（香港：建道神学院、一九九六年）、邢福増編『大時代的宗教信仰――呉耀宗與二十世紀中国基督教』（香港：基督教中国宗教文化研究社、二〇一一年）を参照。

〈23〉周恩来「関於基督教問題的四次談話」前掲『建国以来重要文献選編』第一冊、二二〇－二二七頁。

〈24〉「革新宣言」の正式名称は「新中国建設における中国キリスト教の努力すべき道」。同宣言成立過程の詳細は邢福増『基督教在中国的失敗？――中国共産運動與基督教史論』増訂版（香港：道風書社、二〇一二年、二一－七六頁）を参照。同宣言の日本語訳は富坂キリスト教センター編『原典現代中国キリスト教資料集――プロテスタント教会と中国政府の重要文献 一九五〇－二〇〇〇』（新教出版社、二〇〇八年、一三八－一三九頁）を参照。

〈25〉「中央人民政府政務院関於処理接受美国津貼的文教育救済機関及宗教団体的方針的決定」前掲『建国以来重要文献選編』第一冊、五一〇頁。

〈26〉「中共中央関於積極推進宗教革新運動的支持」一九五一年三月五日、中共中央文献研究室編『建国以来重要文献選編』第二冊、北京：中央文献出版社、一九九二年、九四－九八頁。

〈27〉「統一領導全国基督徒愛国運動　中国基督教抗美援朝三自革新運動委員会準備委員会成立」『天風』総二六二－二六三号、一九五一年五月八日、三〇頁。

〈28〉「中国基督教各教会各団体代表連合宣言」『天風』総二

六二－二六三号、一九五一年五月八日、二－三頁。
〈29〉 劉建平『紅旗下的十字架――新中国成立初期中共対基督教、天主教的政策演変及其影響（一九四九－一九五五）』香港：基督教中国宗教文化研究社、二〇一二年、二二〇頁。
〈30〉 「中国基督教全国会議勝利閉幕」『天風』総四二五－四二七号、一九五四年九月三日、一頁。
〈31〉 呉耀宗「中国基督教三自革新運動四年来的工作報告」、同右、三－一〇頁。
〈32〉 「中国基督教全国会議告全国同道書」、同右、四一頁。
〈33〉 王明道日記：一九五〇年九月二三日、霊石出版社編『王明道日記選輯』香港：霊石出版社、一九九七年、三四三頁。
〈34〉 王明道日記：一九五〇年一〇月二二日、同右、三四四頁。
〈35〉 王長新『又四十年』トロント：加拿大福音出版社、二〇一〇年、二八頁。同著は王明道と親しかった著者が、九〇年代に実施した口述記録を整理し書籍化したもの。
〈36〉 王明道日記：一九五〇年一二月一七日、霊石出版社編、前掲書、二四七頁。
〈37〉 王長新、前掲書、一二－一五頁。
〈38〉 王明道は既に一九三五年の「現代基督教青年会的罪悪」（『霊食季刊』第三四冊、三八－五五頁）と題する一文の中で現代派を激しく批判していた。
〈39〉 中国における基要派に関する研究は姚西伊『為真道争辯――在華新教伝教士基要主義運動』（香港：宣道出版社、二〇〇八年）を参照。
〈40〉 王明道「我們是為了信仰」王明道編著『霊食季刊』第一一四冊、北京：霊食季刊社、一九五五年、五三頁。
〈41〉 王明道日記：一九五一年五月二九日、霊石出版社編、前掲書、三六〇頁。
〈42〉 王明道は主に三自教会の主席となった呉耀宗や中心的人物だった指導者たちを指して「現代派」とよび激しく批判していたが、三自教会に加わった指導者たちのすべてが現代派に括られるわけではないことにも注意が必要である。一般的には基要派（福音派とも呼ばれることもあるが）の立場と考えられている賈玉銘、楊紹唐、陳崇桂といった教会指導者たちも三自教会に加わっている。
〈43〉 劉建平、前掲書、二五五－二五七頁。
〈44〉 王明道「真理呢？毒素呢？」王明道編著『霊食季刊』第一一二冊、北京：霊食季刊社、一九五四年、二五－二六頁。
〈45〉 同右、三四－三五頁。
〈46〉 王長新、前掲書、七六－七七頁。
〈47〉 秦牧「「你們和不信的原不相配、不要同負一軛」的正意與曲解」『天風』総四五三号、一九五五年二月二八日、一〇頁。
〈48〉 丁光訓（Ding Guan-xun, 1915–2012）：上海のセント・ジョーンズ大学卒業後、中華聖公会の執事（Deacon）、上海ＹＭＣＡ学生部幹事を歴任。カナダＳＣＭ（Student

Christian Movement）幹事、アメリカのコロンビア大学およびユニオン神学校留学、スイスのジュネーブでWSCF（World Student Christian Federation、世界学生キリスト教連盟）幹事職を経て、一九五一年に帰国。その後、金陵協和神学院院長、中華聖公会主教を歴任。八〇年代以降、中国基督教三自愛国運動委員会と中国基督教協会の主席・会長職を長年にわたり兼任。丁光訓についての研究は、Wickeri, Philip L., *Reconstructing Christianity in China: K. H. Ting and the Chinese Church* (New York: Orbis Books, 2007) を参照。

〈49〉 崔憲祥（Cui Xian-xiang, 1895–1980）：中華基督教全国総会総幹事、中華全国基督教協進会副会長を歴任。中華人民共和国建国後、「革新宣言」の最初の署名者四〇名の一人となり、中国基督教三自愛国運動委員会副主席に就任。

〈50〉 汪維藩（Wang Wei-fan, 1927–2015）：一九五五年に金陵協和神学院を卒業。反右派闘争期には右派として批判され、文化大革命期は八年間の強制労働。文化大革命後、南京大学宗教研究所所員、金陵協和神学院教務長などを歴任。

〈51〉 「丁光訓常委発言摘要」『天風』総四五七号、一九五五年三月二八日、六－七頁。崔憲祥「一定要鞏固和拡大我們的団結」『天風』総四六四号、一九五五年五月一六日、二－四頁。汪維藩「我們雖多、仍是一個身体」『天風』総四六五号、一九五五年五月二三日、五頁。

〈52〉 邢福増「革命時代的反革命――基督教「王明道反革命集団」案始末考」『中央研究院近代史研究所集刊』第六七期、二〇一〇年三月、台北：中央研究院近代史研究所、二〇一〇年、一二八頁。

〈53〉 王明道「我們是為了信仰」、前掲書、五三頁。

〈54〉 王明道日記：一九五五年六月一六日から七月一六日、霊石出版社編、前掲書、五〇九－五一三頁。

〈55〉 呉耀宗、前掲「中国基督教三自革新運動四年来的工作報告」。

〈56〉 王長新、前掲書、四二－四四頁。

〈57〉 国務院宗教事務局資料組編「王明道及其「基督徒会堂」活動状況資料」一九五五年一月、四川省檔案館蔵、50-391-364（邢福増、前掲「革命時代的反革命」一二四頁より引用）。

〈58〉 「一九五四年基督教工作総結及一九五五年基督教工作的方針任務報告」四川省檔案館蔵、50-24-71（劉建平、前掲書、二七九頁、邢福増、前掲「革命時代的反革命」一二四頁より引用）。

〈59〉 劉建平、前掲書、二八〇－二八一頁。

〈60〉 「習仲勲同志於全国宗教工作会議的総結」（筆記整理）、四川省檔案館蔵、50-24-71（邢福増、前掲「革命時代的反革命」一二五頁より引用）。

〈61〉 「加強団結、明辨是非」（社論）『天風』総四七一－四七二号、一九五五年七月一一日、三－五頁。この社説の実際の執筆者は当時、上海宗教事務処の処長・羅竹風と言われている（邢福増、前掲「革命時代的反革命」一三〇頁を参照）。

〈62〉 崔憲祥「提高警惕緊密団結、為粛清一切反革命分子而努力」『天風』総四七一－四七二号、一九五五年七月一一日、一二頁。邵鏡三「提高警惕、清除一切暗蔵的反革命分子」『天風』同右、一四－一五頁。「提高警惕、粛清一切隠蔵在教会内部反革命分子」（社説）『天風』総四七五－四七六号、一九五五年八月一日、三－四頁。葉保羅「忠告王明道先生、不要被帝国主義利用了」『天風』同右、一七－一九頁。

〈63〉 王長新、前掲書、八四頁。

〈64〉 同右、八八－九〇頁。

〈65〉 『天風』総四七七－四七八号、一九五五年八月一五日、五－二〇頁。

〈66〉 同右、五頁。

〈67〉 林献羔（Lin Xian-gao, 1924–2013）：広州の伝道者。五五年、五八年に逮捕・投獄、七八年に釈放。

〈68〉 「広州各教会同道掲露王明道分子林献羔等反革命罪行」『天風』総四八八－四八九号、一九五五年一〇月三一日、三－六頁。

〈69〉 劉建平、前掲書、二八七頁。邢福増、前掲「革命時代的反革命」一三三頁。

〈70〉 王明道の逮捕から自己批判までの経緯は、王長新、前掲書（八八－一三五頁）を参照。

〈71〉 王梓仲（Wang Zi-zhong, 1895–?）：公理会（会衆派教会）牧師、華北基督教聯合会総幹事。中華人民共和国建国後、「革新宣言」の最初の署名者四〇名の一人となり、中国基督教三自愛国運動委員会常務委員、北京市三自愛国運動委員会主席を歴任。

〈72〉 王明道「我的検討」『天風』総五一五号、一九五六年一〇月一七日、七－九頁。

〈73〉 同右、九頁。

〈74〉 王明道の釈放後から二回目の逮捕までの経緯は、王長新、前掲書（一三六－一五八頁）を参照。

〈75〉 「北京市人民検察院分院起訴書」、王長新、前掲書、一五九－一六三頁。

〈76〉 「北京市中級人民法院刑事判決書」、同右、一六四－一六七頁。

〈77〉 「北京市高級人民法院刑事終審判決書」、同右、一六八－一七一頁。

〈78〉 王長新、前掲書、二五七頁。

〈79〉 「連合礼拝」については、趙天恩『当代中国基督教発展史一九四九－一九九七』修訂版（台北：中福出版、二〇一〇年、一三五－一三九頁）を参照。

趙天恩（Zhao Tian-en, Jonathan Chao, 1938–2004）は、家庭教会を中心とする中国キリスト教研究・支援の開拓的働きをした牧師として知られている。中国遼寧省に生まれるが、幼い頃に両親と共に香港、日本在住を経てアメリカに移住。ウェストミンスター神学校で神学修士号、ペンシルベニア大学で哲学博士号を取得。一九七八年に香港に「中国教会研究センター」、八七年に「中国福音会」を設立し、中国大陸のキリスト教の研究・支援活動を行う。前掲書の

ほかに、『洞燭先機――中共宗教政策及三自会論評』（台北：中福出版、一九九三年）、『霊火淬煉――中国大陸教会復興秘訣』（台北：中福出版、一九九三年）など多数の著作がある。趙天恩の父・趙中輝（Zhao Zhong-hui, Charles Chao, 1916–2010）も牧師であり、彼が設立した「基督教改革宗翻訳社」は多数の神学書・信仰書の翻訳を手掛け、今日に至るまで同社の書物は家庭教会を中心に広く読まれている。

〈80〉 キリスト教育機関の統廃合に関する研究は、邢福増、前掲『基督教在中国的失敗？』（一五三―二一六頁）を参照。

〈81〉 趙天恩、前掲書、八三―八五、一三九、一七四―一七七頁。

〈82〉 姚民権「誠信持守、遭摧彌堅」『香港中文大学基督教研究中心・基督教中国宗教文化研究社通訊』第二九―三〇期、香港：同研究中心・同研究社、二〇一二年一一月、一―七頁。

〈83〉 文化大革命期の北京のキリスト教の状況については、王毓華編著『北京基督教史（一八六三―一九九三）』（北京：北京基督教三自愛国運動委員会、二〇〇五年、三一六―三四二頁）を参照。

〈84〉 文化大革命期のキリスト教の状況については資料が希少なため、詳細な研究は未だなされていないが、概要は趙天恩、前掲書（一八九―二五八頁）を参照。

〈85〉 王長新、前掲書、一八七―一八八、一九九―二〇〇頁。

〈86〉 同右、一七四頁。

〈87〉 同右、一七八、一八六頁。

〈88〉 同右、二〇四頁。

〈88〉 同右、一八一、二〇四頁。

〈90〉 同右、一七三頁。

〈91〉 同右、二五四―二五五頁。

〈91〉 同右、一七五―一七六頁。

〈93〉 「関於我国社会主義時期宗教問題的基本観点和基本政策」赤耐主編『当代中国的宗教工作』北京：唐代中国出版社、一九九九年、四一二―四二九頁。日本語訳は富坂キリスト教センター編、前掲書、五六一―五七四頁。

〈94〉 これ以降、中国基督教三自愛国運動委員会と中国基督教協会の二つを合わせて通称「両会」と呼ばれるようになる。

〈95〉 趙天恩、前掲書、三七一、三八七―三八九頁。

〈96〉 汪維藩・季鳳文「中国基督教四十年」（一九九〇年一二月）、中国基督教三自愛国運動委員会編『中国基督教三自愛国運動文選 一九五〇―一九九二』上海：中国基督教三自愛国運動委員会、一九九三年、三九八頁。

〈97〉 八〇年代の家庭教会の拡大の概要については趙天恩、前掲書、三三〇―三四二、四二四―四三一頁を参照。農村地域の教会についての詳細な研究は、梁家麟『改革開放以来的中国農村教会』（香港：建道神学院、一九九九年）を参照。

〈98〉 袁相枕（Yuan Xiang-zhen, 1914–2005）：北京の福音堂

の伝道者。五五年に逮捕・投獄、七九年に釈放。

〈99〉 謝模善（Xie Mo-shan, 1918–2011）：上海の伝道者。五六年に逮捕・投獄、七九年に釈放。

〈100〉 これらの指導者については、遠志明が編集した家庭教会ドキュメンタリー四部作ＤＶＤ『十字架――耶穌在中国』（神州伝播協会、二〇〇三年）を参照。同作品の邦題は『十字架――イエスは中国におられる』（地引網出版、二〇〇七年）。

〈101〉 王長新、前掲書、二一一―二一七頁。

〈102〉 同右、二二一頁。

〈103〉 Wickeri, Philip L., *ibid.*, p. 280.

〈104〉 王明道の釈放後の歩みについては王長新、前掲書（二二一―二四八頁）を参照。

〈105〉 王明道「上江華院長書」（一）、邢福増編著、前掲書、一一〇頁。

〈106〉 「中共中央統戦部張執一副部長在基督教全国会議上的講話（摘要）」『天風』復二号、一九八一年、一九頁。

〈107〉 王天鐸「為王明道反革命案請求複査事」（一九八一、一九八六年）、邢福増編著、前掲『王明道的最後自白』三四九―三五七頁。これらの申立書は妻・劉景文の反対があり、正式には提出されないままだった。王明道が九一年、劉景文が九二年に相次いで亡くなった後、二〇〇〇年になってようやく王天鐸が弁護士を通して同申立書を正式に提出したが、受理されなかった。こうして王明道の「遺稿」は世に知られることなく埋もれてしまっていたが、その後、香港の研究者・邢福増が王天鐸より五百枚近い遺稿資料を預かり、それらを「晩年平反〔名誉回復〕遺稿」として整理・分析し、編著『王明道的最後自白』に所収して二〇一三年に出版された。

〈108〉 王天鐸「為王明道反革命案請求複査事」（一九八一）、邢福増編著、前掲書、三五〇頁。

〈109〉 同右。

〈110〉 王天鐸「為王明道反革命案請求複査事」（一九八六）、邢福増編著、前掲書、三五六頁。

〈111〉 王明道「上江華院長書」（二）、邢福増編著、前掲書、一三六頁。

〈112〉 王明道「上江華院長書」（十三）、邢福増編著、前掲書、二一一頁。

〈113〉 反革命罪の改正については、坂口一成「中国刑法における「反革命の罪」から「国家の安全に危害を加える罪」への改正の意味――「反革命目的」の削除を手がかりに」（関西大学法学研究所編『ノモス』第一八号、二〇〇六年、四九―六一頁）を参照。

〈114〉 「当局公認宗教組織」とはプロテスタントの場合は中国基督教三自愛国運動委員会と中国基督教協会に登録している三自教会、またカトリックの場合は、中国天主教愛国会と中国天主教主教団に登録している教会を指す。

〈115〉 邢福増編著、前掲書、四〇頁。

〈116〉 孫毅、前掲「我們為何不加入〝三自〟愛国会」九〇頁。

〈117〉「各地教会和牧者対〝至死忠心――王明道與中国家庭教会的興起〟研討会的祝賀」www.chinaaid.net/2015/06/blog-post_44.html（二〇一七年一一月三〇日閲覧）。二〇一五年六月二六～二七日、対華援助協会とカナダ中国福音会の主催によりカナダ・バンクーバーで開催されたシンポジウム。

〈118〉王明道と守望教会の共通性と相違性を「市民的不服従」（civil disobedience）という概念で比較分析した研究として袁浩「中国基督教與與不服従的伝統――以王明道、唐河教会與守望教会為例」（『道風：基督教文化評論』第四四期、香港：道風書社、二〇一六年、八七－一二二頁）がある。袁浩は両者の異なる時代的・社会的背景を踏まえつつ、(1)前者が個人的不服従であったのに対して、後者は教会としての組織的不服従であったこと、(2)前者の不服従の対象が現代派とその運動であったのに対して、後者は国家権力に対する抵抗であり、市民社会の形成を視野に入れたものであったこと、(3)前者の抵抗は信仰的混淆主義を拒絶するファンダメンタリズムの神学に基づくものであったのに対して、後者は市民の役割や権利意識を踏まえたカルヴァン主義神学であったことを指摘している。

〈119〉王艾明（Wang Ai-ming, 1963–）：南京師範大学、南京大学を経て、スイスのヌーシャテル大学で神学修士号、バーゼル大学で神学博士号を取得。金陵協和神学院副院長、『金陵神学誌』編集長、中国宗教学会理事を歴任。現代中国キリスト教を代表する神学者。現在、トロント在住。

〈120〉王艾明「教会の自治――中国の発展・安定・調和のための道筋」、同著、拙編訳『王道――二一世紀中国の教会と市民社会のための神学』新教出版社、二〇一二年、八一頁。

〈121〉劉鵬（Liu Peng, 1951–）：中国社会科学院アメリカ研究所研究員、北京普世社会科学研究所所長。アメリカ宗教、政教関係、宗教と法律問題を専門とする。所長を務める普世社会科学研究所より『中国基督教家庭教会問題研究』（二〇〇九年）、『中国基督教家庭教会問題研究報告（二）』（二〇一五年）を編集・出版している。

〈122〉于建嵘（Yu Jian-rong, 1962–）：中国社会科学院農村発展センター研究員、教授、社会問題研究センター主任。農村問題を中心とする社会問題を専門とする。家庭教会問題に関して「中国基督教家庭教会向何処去？」（『領導者』二〇〇八年八月号）、「中国基督教家庭教会合法化研究」（『戦略與管理』二〇一〇年第三、四期）、「為基督教家庭教会脱敏」（二〇〇八年一二月一一日、北京大学での講演、香港中文大学・中国研究服務中心ウェブサイト http://paper.usc.cuhk.edu.hk/Details.aspx?id=6918、二〇一七年一一月三〇日閲覧）などの論稿がある。

〈123〉王艾明の最近の論稿は『体制教会與自由教会』（香港：香港中文大学崇基学院・宗教與中国社会研究中心、二〇一七年）を参照。

〈124〉本稿では紙幅の関係もあり、三自教会の詳細な歴史・

構造・神学などについて論じることができなかったが、現在の三自教会は王明道が当時批判していたような「現代派」という言葉で一括りにできるわけではなく、また「三自教会」と「家庭教会」を単純な二項対立的な敵対関係と見るべきではないことを付言しておきたい。現代中国のキリスト教については、王艾明著、拙編訳、前掲『王道――二一世紀中国の教会と市民社会のための神学』、拙稿、前掲「中華人民共和国におけるキリスト教――一九四九年から現在まで」、拙稿、前掲「福音は日本と中国のはざ間の波濤を超えられるか？――日中キリスト教関係の回顧と展望」を参照。